

編集後記

○昭和六十三年七月二十六日から三十日まで、五日間の韓国研修旅行に、学生諸君四十名を引率して行ってきた、その報告少々。学生は、初等教育学科を中心にしているが、国文学科も英文文学科も短期大学部生も混在するという編成、引率者は団長として私（横山邦治）と初等教育学科長の木下太郎先生、付高と姉妹縁組している柳一高校の訪問を主目的とされる松島哲也付高教頭も随行下さり、韓国からの留学生で本学大学院生の金善美さんも好意的に随行、通訳を兼ねて下さることになった。この研修旅行の世話をして下さる日本旅行社からは随行員の谷口さんの外、本学と全州教育大学との姉妹縁組の橋渡し役をして下さった元広島駅長で日本旅行社の前本部長であられた仁田茂氏が同行して下さる。仁田さんは、全州教育大学の前身である全州師範の御出身で、何かと細かい御配慮をして下さり、大変ありがたいことであった。

○姉妹縁組の全州教育大学訪問が主目的であり、そこでの学生同志の交歓が主要課題であったので、いくらカインスタント気味ではあったけれど、金嬢の奉仕的指導によって韓国

語会話の詰め込みやら、交歓会のための合唱訓練やらで、学生諸君は大忙しであった。それらも、木下先生の御指導のもとに準備万端相整い、七月二十六日の出発である。福岡空港では曇天、十四時五分発の日航便で釜山空港へ、十五時五十分には到着、一っ飛びである。眼下は雲ばかり、前途が少々心細くはなった次第である。福岡空港でも釜山空港でも相当厳しい検査があるであろうと覚悟していたのであるが、五輪前夜にかかわらず左程のものを感じないままで釜山空港に到着である、全くの善意の研修旅行であるから厳重検査があるはずもなかった。釜山空港外は、心配していた空模様も豪雨という有様、その雨についてバス二台に分乗した私どもは一路慶州である。雨で煙っており、景色も十分見られないのであるが、山々の緑が鮮明に映ずる。

○釜山から慶州までは高速道路である、雨の中を北に向うだけ、小山と野原と農家が点在する凡たる風物の中を北に向うだけである。観光バスは百キロオーバーで直進、快と言え

ば快、恐と言えば恐である、京釜高速国道の一部で、最も整備された高速道ではあるが、スピード感覚が日本と一寸異なる感じである。慶州市内のレストランで韓国風料理の夕食である、団体旅行というのは、いかに食事をまとめてスムーズにさせるかというのが旅行社としてのテーマらしい。事実、私どもも大切な研修よりも食事の内容のことが印象に強く残っている有様で、食欲が人間を支配する重要なキイポイントであることを実感した次第である。キムチと鍋料理、辛さが基調の韓国料理を、入国第一回目の食事で堪能させられることとなる。学生諸君、結構食欲旺盛であったけれど、金嬢の生き生きした表情には及ばない、味覚の民族性というのは、慣れではあるうが、確かに存在する。

○夕食後、慶州郊外にある慶州東急ホテルにチェックイン、新開発地区に建設された高級ホテルで、ホテルにあらゆる施設が整備されているが、民情視察に夜の街に出掛けるといふのは不可能である。学生諸君でも元氣のよいのは、ホテル内の健全ディスコでダンスを楽しんだのもいたようであるが、私ども準老人達は無為にして消閑（一杯の酒ということです）、夜が更けてくると腹が空いてきて、ホテル内をブラブラ散歩している学生諸君数名と喫茶室、コーヒーとケーキ。コーヒーはいくらかトロリと濃いくて苦い味が舌に残る、韓国独特のコーヒー豆の炒り方があるの

か、コーヒーの入れ方があるのか、全州でもソウルでも皆共通の味がして、一寸馴染めない感じである。ケーキは純洋風で、韓国独特のお菓子というのは餅類か飴類が多く、それも薬味の風があつて、日本のように各地名産の茶菓子があるという風ではなさそうである。甘味より辛味を愛好する国民性なのであるか、韓国女性に齶歯が少く、明眸皓齒の美人が多いのはその故為だと言った人がいたけれど、そんなのかも知れない。若人とのおしゃべりは楽しいが、準老人には意の通じない和製英語が頻発して少々疲れる、若人にとっては準老人の繰言は退屈とおあいこであるろうが。雨の夜は更けて、韓国の第一夜は平和裡に暮。

○七月二十七日、朝食はバイキング、キムチが沢山あることが違うぐらいで、日本のホテルのバイキングと大差はない、日本人の観光客向けにできているのであろう。欧州系、南方系など多くの外人多種であるが、圧倒的に日本人が多いホテルで、日本国内のホテルとあまり変らない雰囲気である。円高現象がこうした風潮を助長しているのであろうし、私どもその現象を利用しているのであるが、果たしていいことなのかどうか判らない。ホテ

ルを観光用貸切バスで出発して、日本語の大変上手なガイドさん(中年の大変な美人でシヤキシヤキした所作のガイドさんで、学生たちに対して自分を「オネエサン」と呼んでいた、外人相手のガイドさんは収入も多く一種のエリートらしいが、釜山の西方の晋州という田舎町の出身だが、今はソウルに住んでいると問わず語りで話してくれる。日本でも東京に人口が集中するように、韓国でもソウルに人口が集中するのであろう。発展途上国病なのか、先進国病なのかは判らないが、よいこととは思われない。)が、最初に注意したが、物の買い方である。免税店に案内するから、妙なところで高い買物をしないようにと言うのである。そして案内されたのが慶州の免税店、外国の観光客の少い全州では案内されなかったが、慶州でもソウルでも免税店へ案内されて、そこで買物を勧められる時間が一番多かったという印象である。円高によって大変安く買物ができると宣伝されており、その上免税ということ、購買欲を喚起するようにシステム化しているようである。若い女性の旺盛な購買欲は、一層煽られるようになっている。一時日本でも外貨獲得というので狂奔したけれど、その韓国版である。今や

韓国も外貨保有高では世界有数の国になり始めているようであるが、この調子で外貨獲得合戦をすれば、現在日本が世界各国から片買易と非難されているようなことが、やがて韓国にも生じてくるのではないかなど、いらざる他人の痴気病もしたくなる。ともあれ若い学生諸嬢の旺盛にして計算高い、ある意味では賢明な購買欲に伝染して、大分無用なものを買わされた。噴飯ものはソウルでのこと、何軒か連れて行かれた免税店、一寸官庁的なその店の前の路上で、中年の小母さんに食いつかれて牛革で上等の財布(口上)を売り付けられ、バスに向って逃げかけたのだがつい立ち止まったのが運の尽き、パンパンと財布を十ヶ押し付けられ、三千円むしり取られてしまった。三千円ならまあ安いものよとガイドさんに見せると、ああいうところで立ち止まっては駄目だと叱られてしまった。よく見ると相当いい加減の造りで、ガイドさんは何とも形容のむつかしい微笑をしていた、これなど賢明ならざる買物の典型で、お土産と言って皆さんに進呈するわけにもいかず、今も研究室の片隅でホコリをかぶっている。

○慶州での研修は仏園寺見学から始まる、慶

州郊外十四キロ東南に位置し、吐含山の中腹に雄大な姿を見せている。韓国有数の大寺院であるが、新羅が三国統一後の最盛時、七世紀中葉に新羅三十五代景德王の命により完成した寺院とのこと、浄土世界を現世にと念じて構築したかと思える花崗岩造りの土台部分は、正面中央の橋梁から白鳥の翼のように両端に拡がる基壇で私どもを圧倒してくる。基壇の上にある木造建築は朝鮮式の色彩で華麗であるが、創建当時のものではない。創建時の建物は、壬辰の乱即ち日本流に申せば大閩様の朝鮮征伐によって焼失してしまったのである。数十年にわたる暴虐の限りを尽した家古侵攻時にも残ったらしい建物が、倭軍によって焼亡してしまったのである。暴行の猛火に包まれた痕跡が石の表面に浅黒く残っている、それは私どもが原爆ドームを見る時の米

国に対する感慨を韓国の人にも同様に与えるのではないかとの思いがするのであるが、韓国のガイドさんは日本人の観光客には説明しないようである。往時の十分の一と説明されてもピンとこない広大な寺域であるが、雨中を歩いて寺々を巡拝する、寺々は緑におおわれており、雨に濡れた青葉は美しいが、日本の古い社寺に多く見られる巨大な古木はほと

んど見られない、こんなところまで侵寇の傷痕を見て取ろうとするのは、私の思い込みであらうか。

○学生諸嬢は、多くの王陵が集まっており、金冠発掘で著名な天馬陵のある大陵苑と国立慶州博物館の見学であるが、私は先年見学したことがあるので、三国統一の基磐作りをした英雄、太宗武烈王陵と太宗の盟友金瘦信の墓を見学したくて別行動とする、仁田氏とタクシーで一巡である。慶州市内を抜けて西に向い川を渡って少し南下すると、小さな山並みの麓に多くの陵らしきが点在しているが、それは文武王によって三国統一後慶州を主都として三百年も続いた新羅の栄光を示すものと言えようが、やがて一際大きく周囲一帯を屋根付きの土塀をめぐらした入場門付きの王陵が見えてくる。域内に数箇の陵が点在するが、域内に入ってすぐの一段と大きい陵が武烈王陵らしい、説明板の文字をたどり読みしでの判断である。新羅の王陵は、石積みの上に土盛りをした円墳で小高い岡という感じであるが、武烈王陵は石の基壇が見えて周囲がきれいに整備されてはいても他奇あるものではない。日本書紀に「仍以春秋為質。春秋美姿顔善談笑。」(大化三年是歳の条)と記録

された人、質でありながら悠然と「談笑」した容姿端麗の貴公子春秋は、やがて帰国して義兄でもある花郎出身の金瘦信の軍事的協力を得て新羅による韓半島統一の基磐作りに六面八臂の大活躍するのであるが、大化改新の時代の日本の有様をその目で見た人の奥津城と思えば、私にはそれなりの感慨があった。それにしても、当時の大和朝廷と韓半島の諸国との親近感濃密で、大和朝廷が帰化人か騎馬征服民族かは知らないが、国際感覚なしと評される日本人ではあるけれども、天平人のそれはなかなかのものではなかったかなと思う。

○武烈王陵から山際を北上すると、玉女峰二百十四米という小山の麓に行き着く、武烈王陵に比べて掃除が行き届き美しく整備されている感じ、広い駐車場に雨中の故為か一台も車を見受けられない、小ぎれいな入場券の発売所でパンフレット類はないかと尋ねるが、日本語は通じないらしい。パンフレット類はもちろん絵葉書類も見当らない、これは武烈王陵でも同じこと、左程の観光客も居ないのであるか。石を敷きつめた小道をしばらく登ると金瘦信の墓地である、なだらかな丘の中腹が広く切り開かれて二段の広場になっ

る、幅広く立派な石段を登ると墓がある。陵と言ってもよい規模のものであるが、普通の王陵と違うのは、浮彫りの見える花崗岩の基壇が土盛りの周囲にめぐらされていることである。浮彫りは、十二支の動物が当代の官人かと思われる服装をした姿で彫られている、その上の土盛りは青々と美しい芝生でおおわれている。(写真で見る掛陵によく似ている。)この墓の周辺一帯の手入れは行き届いており、荒廃した感じは全くない、武烈王陵と比較してそう感じられる。「三国遺事」など読むかぎりでは、金春秋武烈王の陰の人として軍事面で協力、武烈王亡き後は文武王を助けて三国統一の偉業を達成せしめながら、決して自からは覇権を握ろうとしなかった金瘦信に対する韓国人たちの尊崇の念がこんなところにも反映しているのかなと思うのは、これも思い込みの一つであろうか。

○雨は止まない、暴雨である、その中を昼食をすませて姉妹縁組校の全州教育大学のある全州に向う。大邱直轄市の北方の郊外を通過して光州直轄市に向う、88オリンピック高速国道を南原まで、南原のインターを出て全州までは普通の国道だが、五輪のためか存分に金をかけて改装が進んでおり、大半が高速並みで

ある、工事中も大分あったけれど。高速道とも国道とも、左右に展望される田園風景も美しいが、山々の緑が新鮮で美しい。高速道の途中で雨が止み、雲間から洩れる陽の光に映ずる緑は一層鮮明である。韓国の山々は、ほとんど小山という感じで、高峻という感じの山はあまり見受けられない、岩石の露出した岩山を見受けることはあるけれど、大半がおだやかな表情を見せている緑の山々である。私の戦前に学習した地理の知識では、韓国の山はつるつるのはげ山ばかりで緑がないというものであった。事実、戦前(即ち殖民地時代まで)の韓国の山々は、はげ山ばかりであったようである。何時ごろからそうであったのかは知らない、李朝末期には政治的混乱が続いて、山の所有者の多くは特権的不在地主で統治能力低下から治山までには目が届かず、農民たちがオンドル用の燃料として根こそぎ木を伐採し、落葉まで掻き集めるといふ状況となり、一木一草もないはげ山が連なるという有様になっていたようである。独立後の軍政下になって、何時からかは知らないが、強制的に入山禁止として緑の復活をはかったよう

である、確かに若い木々ばかりであるようであるけれども、若い緑が自然の讃歌を唱いあげているような再生の姿である。漢江の奇蹟とか言って韓国の経済力の強化が云々される昨今であるが、その力の根元をことうした治山能力にも見出し得ると感じるのは、これ又私の思い込みでありましょうか。ただそう思い込みにたくなるほどに、山々の緑は鮮明であったのである。

○南原は、韓国の代表的古典ともいべき春香伝の舞台である。旅行社のプログラムに入っていないかったようであるが、全州教育大学の学長先生が南原のインターを通過して、春香の恋物語の舞台を見学させるようにと云われたというので、一旦停車である。当方も予定になくして春香伝の何たるかを知らず、春香と両班の才子李夢龍が初めて会ったという広寒楼のある公園を左手に見て通過、大きなブランコが見えたので何かと聞くと、そのブランコ(鞦韆という)を漕ぐ春香を広寒楼に居た夢龍が見染めたのだとの話、たわいない恋物語かという感想を持っただけで終り。しかし学長先生がわざわざ案内するように言われたというのが気になり、後で韓教務処長に聞いてみると、春香伝というのは日本の源氏物語にも比すべき古典として韓国では尊重されているものようである。李朝のハンゲル小説

なのであるが、元来はパンソリという一種の民衆歌劇のような形で上演されていた話を下敷きにハングルを使って小説化したもの、作者未詳だが内容（貞女の恋もの）がたりであると同時に両班貴族にたいする諷刺と反抗とによってつらぬかれていた。「朝鮮」金達寿著）から考えて、腐敗した社会に対する批判精神旺盛な知識人の手になるものと思われ、しかもテキストが何種類かあって、研究対象としても好適なものという。韓国を代表する古典文学の舞台というのであれば、もう少し丁寧に見学しておけばよかったと思ったけれど、後の祭という次第。

○全州は、慶州の豪雨は嘘のように快晴、三年前に姉妹縁組締結で訪問した時の印象に比して、道路が格段によくなっていることであった。まず全州教育大学を表敬訪問、宋亨浩学長を始め多くの先生方の出迎えを受ける、私どもは学長室で明日の日程の打ち合せ、学生諸君は学内諸施設を案内していただく。本学との姉妹縁組を積極的に推進された李前学長の新構想による校内諸施設の改築が推進されているが、本館部分が外枠だけ完成して足組みがそのままです工事が進んでいない様子、全州は金大中氏の地盤だからなかなか予算が

廻ってこないとは、後日の酒席でのどなたかの冗談半分めいた発言、校門は一新されていたが、これは国の予算を上手に獲得して得た成果である、これ又宋学長の話である。国立の大学とは言っても、それだからこそであるのか、韓国では大統領出身の道予算が優先されるとか何とかいう噂を裏付けるような、一方では、そうでもないような話、国情の違いもあるし一概には言えないにしても、教育運営には公私を問わず御苦労があるということである。

○全羅北道の中心地であり、新羅時代からの古都であった全州には、多くの名所名物があるようであるが、全国的に著名な食物にビビンパプという焼めし風混ぜ御飯があり、夕食は市内の専門店で試食である、典型的韓国風食事と申すべきであって、唐辛子で赤く染まった辛さは何とも形容しがたいけれど、風味は抜群である。全州第一夜は、無理をお願いして、私と仁田氏は宋学長の公館に宿泊させていただく。全州での宿泊をホームステイ風にしてみたらという気持があり、実験的に私だけでも一般民家に泊めていただけいかと申し出ていたら、宋学長の家ということになってしまったのである。学長公館であるか

ら全州教育大学の裏門あたりにあり、木立の中に小じんまりとまとまった洋風の感じの館で、韓国風の家造りとは違うようである。オンドルなどの生活様式は韓国風で、座式である、台所や玄関脇の応接セットなどは洋風で、韓国も急速に近代化している様子を感じるのである。一般民家とは違って上流家庭であるから、私の希望した民衆の姿に直接触れるということにはならなかったけれど、夜中のこと、大声放歌して門前を過ぎる物音に目覚める、怨むがごとく嘆くがごとく、綿々として絶えない繰言とも聞える歌声は、いづこにもある酔っぱらいの生態なのであるが、腹の底からしぼり出すような声であったせいか、民衆の怨み節のようにも聞えたことである。自己主張が強いように感じられる韓国語のパピポペボ音の多い発音が、そう感じさせるのかも知れないが。

○七月二十八日、午前中は全州教育大学における歓迎式である。立派な式次第のパンプレットができており、前回の第一回訪問時も大変な歓迎だったとのこと、李前学長のお気持ちを継いで本学との姉妹縁組関係を維持していくようとしておられる宋学長の気配りが随所に感じられる演出であった。当日宋学長は急に

ソウルに出張ということで（五輪開催真近と
なつて、学生の動きが激しいので、全国の大
学の学長を集めて対策を協議するとかで、何
かと大変のようであった。南北の学生代表の
会談を開催するとかで、政府と対立していた
ことに對する協議で、学生の飛び上りには批
判的ではあつたが、学長先生自身も南北問題
には民族統一ということで悩んでおられるよ
うであつた。北朝鮮の政治の在り方に対して
は、絶対的否定をしておられたが、韓周燮
教務処長さんと姜時中学生処長さんが全てを
取りしきられた。本学の学生が四十一名であ
るから、全州教育大学側も同数ぐらいの学生
の出席による交歓会と考へていたところ、今
夏の全州教育大学における在職者研修の人々
（韓国の教員養成は、数年前までは二年制の
師範大学で行なわれており、当然現在の小学
校の先生方は短大卒の資格しかないわけで、
それを四年制大学に数年前昇格した各教育大
学において夏期休暇中集中的研修を行なつて
単位を充足させ、四年制大学同等の資格を与
える方途が講じられているようである。）が参
加しており、研修生の一部ということであつ
たけれど三百名近い人々が集まつていた。歡
迎の行事はプログラムどおりと進められた

が、本学の学生代表が懸命に練習した韓国語
の答辭は、聴衆に微笑と感動を与えたように
思う。

○歡迎会行事終了後、親善文化交流行事があ
り、私と韓周燮先生とで講義をすることとな
つた。學術交流だから互いに講義し合うとい
う話し合いになつていたので、私は金嬢に通
訳してもらつて「桃太郎の話と奥野発言」と
いう話をさせていただいた、前の編集後記に
書いた話を敷衍したものの、角田房子著の「閔
妃暗殺」が日本でベストセラーになつてい
ることに触れて、閔妃暗殺をめぐる日本の蛮
行を客観的に記述した本がよく日本人に読ま
れていることは、奥野発言的思考をする日本
人ばかりではないことを証明していると結ん
だ、奥野発言という言葉が出た途端に顔色を
変えた人が多かつたけれど、最後には納得し
たような雰囲気になつたように思う。それに
しても、日本人というのは、自分の恥部を隠
蔽したがる奇癖があるようである。最近の日
本歴史の教科書では、中学用は勿論のこと高
校用でも閔妃暗殺という大事件が一行も記載
していないのである。韓国併合という大事件
さえ極めて通り一遍の記述しかしていないと
いうのが実態で、これでは反省の念なしと韓

国から非難されても止むを得ないと思われ
る。このあたりの歴史は赤裸々に教え込まれ
ている韓国人たちと、こういう風に目かく
しされた歴史しか教えられない日本人とで
は、歴史認識の在り様に隔たりが生ずるのは
当然で、そこに国際感覚の欠如した裸の王
様の日本人像というものが造型されて、近隣
の被侵略国から反撥されるに至つて、近隣
に思われる。近時三省堂の英語教科書の日
本軍の蛮行に関する記述内容について、自民
党内のウルトラ右翼からイチヤモンがつけら
れ、文部省の検閲恐怖症の弱腰出版者側が自
主的に撤回した事件があつたけれど、誤つた
愛国主義が日本人の正しい歴史認識の目を覆
う結果となつたように思われる。ナチズムの
ユダヤ人虐待という非人道的蛮行を教え込ん
でいるという西ドイツと、日本軍国主義の愚
行を覆い隠そうとする日本と、果たしてどち
らが正しいのであろうか。私どもは、今一度
自分たちの歴史認識の在り様について自省し
なくては、日本人としての正しい国際感覚が
育たないのではないかと思ふことである。

○韓先生のお話しは、「全州の文化と教育の
現状」と題して、全州における文化と教育の
歴史的展望を踏まえての現状報告をして下さ

った。全州ひいては全羅北道の文化現状が実態に即して把握できた、上手な日本語で話して下さったので（四十数年ぶりに使う日本語だがと断わられたけれど、日本併合時の強制的教育で日本語がたたき込まれているだけに、折目正しい日本語であった。それだけに、日本併合時の韓国人たちの心の痛みに思いを至さざるを得ないのである、独立後日本語を敢えて使わなかったと言われた韓先生のお言葉を噛み締めたことである。、私どもにも大変よく判ったけれど、私自身が韓国語で話せないことに自省しきりである。韓国の新聞も週刊誌も漢字のひろい読みで何となく判るような気もするが、ハンゲルが皆無だから細かいところは判らない、外国語音痴では国際感覚など申すことはできないのかも知れない。特別記念講義の後は、芸能発表、最初双方の校歌をお互いの原語で交換合唱（本学の学生はこのために相当練習したのであるが、途中で一寸自信のない部分が出て、微笑をさそっていたようである。）、次いで全州教育大学の学生さんたちによる合唱やら器楽合奏など盛り沢山であったが、殊に全州と群山の附属校の演奏が素敵であった。全州の附属校の演芸は、小学校六年生の崔智媛という女

の子の太平舞という舞踊、太鼓をたたく人との競演で優雅な民族舞踊である、次にやはり六年生の金柱憲という女の子の春香歌中叫りという唱、春香伝の前身というパンソリであるるか、歌劇のアリヤのように張りつめて嫺嫺たる唱である。李朝時代からの伝統芸であるようであるが、全州のような古都では上流社会で稽古事としてこうした伝統芸を教えるものがあるようで、あれほど上手に演能できるのは小さい時から仕付けてあるからですとは韓先生の話である。春香伝の話が、民衆の中に生き続けていることの反映でもあり、春香伝の話というものは今少し真剣に学ぶべき対象であることを再認識することである。群山の附属校の演能は器楽合奏で、六年と四年である、音楽教育を校長先生が重視されていて、全学で合奏のコンクールがあり、その中で優秀なクラスを連れてきたのであるが、生徒は選抜されているのではないとのこと、附属校として優秀な児童が集まっていたようであるが、韓国の小学校における教育レベルの高さをうかがわせる演奏ではあった。いずれにしても、心のこもった演奏で、全州教育大学の歓迎の意が充分に当方へ伝わるものと言え、恐縮したことであった。

○セレモニーの後は、図書館棟の一室で懇談会、昼食を兼ねたパーティである。出席の学生さんは当方と同じくらいの人数で、男女同数くらいである。洋風の立食式パーティであるが、食べものには韓国風の工夫がしてあるようである。国立の大学として、国際交流のための特別予算はないとのこと、歓迎のための各種予算の捻出には相当苦労しておられると後で聞いたことであるが、心のこもった献立で、大変ありがたいことであった。自家製というか家庭的というか手製の臭いがあった、それが親密感を濃くさせるといふ感じのパーティである。学生諸君は、若さの特権でもあろうか、急ごしらえと言ってよいタダドしい韓国語と手ぶりで意志の疎通をはかっている。手紙の交換の約束も大分できていたようである。気持よく交歓会は進行し、いかほどか高揚した気分では終了したわけで、今回の研修旅行の主要目的は無事完了したということになる。

○パーティ終了後、全州教育大学の金鎔熙図書館長さん（体育教育の教授、戦時中建国大学に在籍していたと話しておられ、日本語は大変上手な方であった）らのご案内で、全州市の南の方にある内蔵山国立公園見学に出

発、約一時間半（片道）ばかりの車中では学生の質問に答える形で韓国事情について色々教えていただいた。初等教育学科の学生が多いので、韓国の教育事情についての質問が過半であったが、その問答で感じたことは、金先生をはじめ同乗しておられた全州教育大学の先生方に、韓国の現状についての国際的視野に基く客観的認識が明確であるということであった。日本との文化的教育的格差についての認識も醒めており、殖民地時代の怨念は怨念として別置き、先進国としての日本との格差を縮めるための意欲が極めて旺盛であると感じられた。閉鎖的島国根性から国際的視野の欠如が云々される日本人との違いが、何となく感じられたことである。中国大陸と陸続きで、極東の半島に位置しているだけに侵略の脅威にさらされ続けてきた国の、自然に身についた国際性とも言うおうか。

○内蔵山は、紅葉と清流と奇岩怪石の山で著名なところらしいが、ケーブルカーで展望台に昇る時間がないということ、その景色の大観は不可、季節も紅葉時ではないので、本当の美しさを得るに至らない。公園の中にある内蔵寺を参拝する。百済の武王三十七年（六三六年）に靈隱祖師の創建したものと

かで極めて由緒ある寺院であるらしいが、丁酉再乱（秀吉の二度目の朝鮮出兵を指す）で焼失、近時では朝鮮動乱でも焼失しており、前後七度の重建を経ているようである。古い建築物は残っていないのであるが、内蔵山内蔵寺という扁額のある一柱門、山門のごときを通り過ぎてしばらく進むと楓の木立を抜けて定慧楼という二階建の立派な望楼あり、蓮の池畔に美しい姿を見せている。極楽橋という石造の橋を渡って天王門を入ると、正面に大雄殿あって、広い前庭の左右に観音殿とか極楽殿などという仏殿が韓国式の朱と紺を主潮とする極彩色に華やいで建ち並んでいる。殿舎の中に祭られる仏像、金色に輝くものばかりであるが、仏具を含めて全て新しいものによって整えられている。貴重な文化遺産を失った悲哀を感じるのであるが、その文化遺産喪失に関与した日本人としての負い目を感じる。古寺にただよう閑寂の趣きは感じられないが、深緑の楓の葉を透して見える内蔵寺を囲む山々、奇岩の露出する山と深い緑に覆われた山とに囲まれた景観は、秋の紅葉時にはさぞかしと思われる自然のたたくまいである。夏の始まり、今は観光客も少ないようである。信仰の対象としての参拝者という感じ

の人は全く見当たらなかった。韓国の宗教事情は知らないが、仏教が日本ほどに土着化していないのかと思うことである。

○全州市にとって返して市内観光、かつては後百済（八九二―九三六）の主都であり、李氏朝鮮を開いた李成桂の祖先の本貫の地というので由緒ある建物などの遺物が多く、観光すべき古跡は沢山あると観光案内などには書いてあるのだが、ガイドさんは全州についてあまり知らないと言う。いわゆる外国人相手の観光ルートには載っていない古都であるらしい。まずは全州の象徴とも言うべき豊南門からである。李朝時代には、全州府として、全羅南、北道、済州道の三道を管轄する監宮が置かれ、東西南北に城門を開いた城郭に囲まれていた。現在では、全州川の近くの市中心部に、四城門の一つの豊南門だけが、優美な姿を残している。これは、李朝英祖四十二年（一七六七）に建てられたもので、二階建ての楼門は、精巧な木組と丹青の彩色がほどこされ、全高十五・五メートル、湖南第一の城門である。（高橋隆博著「韓国史跡と美術の旅」二二五―二二六）城門は整備されて美しい姿を見せているが、その周囲は道路拡幅中で未整備、周辺が古い市場となっており、沢

山の入出で芋の子を洗うがごとし、そこにバスとタクシーと車が殺到するのであるから大混乱、曲芸的運転をする神風タクシーも大分見かけたけれど、日本の敗戦直後の闇市に豊かな物資を持ち込んだという感じである。そこでしばらく市場の中を見学、細い露路に数多くの店舗が軒を並べ、色彩豊かな品物が展示してあり、私どもには全く判らない言葉が飛び交う有様は、闇市さながらでありながら豊かさとおおらかさが感じられる。豊富な食品が溢れるばかりで飢餓感が全く見当たらないからであろう。豊かさに対する人間の欲望がキラキラしているとでも評し得ようか。ここでは見るだけで買物してはいけないというガイドさんのお達しで馳足見学である。言葉もよく判らないので、高い買物をさせられますよとの御親切であるが、本当はこうしたところで買物すれば楽しいのであろうかと思つたことである。バスに再び乗ってからは、市場の雑踏を抜け出すのに一苦勞、次に何を見学するかとなるとガイドさんは当てなし。川沿いにしばらく走っていると古い韓国風の屋根の見える町並みに出たので、そこで車を止めてもらって露路に入っていくと、修復中の古い建物が見える、李朝時代の学寮の跡らし

い。そのあたりをウロウロしている間に夕方だという。外は随分明るいのであるが、韓国は目下サマータイムで、夕食は早いというので、コア・ホテルへ引きあげる。途中で両班の屋敷だという声も聞いたが、素通りである。肇慶廟・大韓肇慶壇・慶基殿・寒碧楼・梧木台全州客舎・全州市立博物館など見学すべきところは沢山あるはずであったが、全州教育大学の先生方には地元の史蹟類については慣れ過ぎて興なく認識も薄い様子、ガイドさんには全く予備知識なしで、見学するを得なかつた、一つだけ引き揚げる途中で耳に残つた話は、慶基殿かどこかの側を通つていたら、広い林ともいうべき一隅が小学校か何かになっており、周囲の調和を破っている感じがしたので、どうしたのかと聞いたところ、日本統治時代に韓国の伝統的文化遺産を破壊する形で新時代を表徴する施設を建設したけれど、これも李王朝の権威を否定するために敢えて作った学校だというのである。韓国人たちの心の痛みを、ここでも確認した思いがした。

○この夜も全州教育大学の先生方との交流パーティーあり（到着した夜も、宋学長先生御招待のパーティーがあったのであるが）、疲れて早

々に部屋に閉じこもってしまったけれど、学生諸嬢はサマータイムの薄暮を利用して、今日知り合つたばかりの全州教育大学の女子学生さんも訪問してきたりで、散策やらショッピングを楽しんだようである。コアホテルは全州市の最高級ホテルらしく、ショッピングでホテルの名前を告げたら途端に市場の小母さんの態度が変わつたと話していた学生もいたが、円高がこうした贅沢を私どもに許しているわけであろう。

○七月二十九日は、早朝、全州教育大学の先生方のお見送りを受けてソウルに向かう。湖南高速国道を一路北上、水原というところで高速道路をおりて韓国民俗村見学である。全州教育大学の李前学長が迎えて下さる。この李先生と仁田氏とが全州師範で先輩と後輩の関係であり、仁田氏が武田ミキ学長とお知り合いであったことからの姉妹縁組成立であったので、李先生は本学にとって恩人とも言える人である。韓国民俗村見学からソウルまでお付き合ひ下さる。民俗村は韓国の古い民家の模型―濟州島を初めとして東西南北各地のものを両班の豪家も含めて―を集めて展示したもの、日本の明治村に類するものかと思つてはいたけれど、どうも国営というのではな

く宮利的事業であるらしく、実物をそのまま移築したというものでもないらしい、セマウル運動などで急速に地方の民家が消滅していることから生じる懐古趣味が、この民俗村の隆盛を生んでいるのであろうか、大変な人波である。土俗的祭祠のあるところで占いのお婆さんがおり、興が湧いて占ってもらう。片言の日本語が話せて何とか意を通じさせようと努力してくれるのだが、どうも判らないことが多い。日本の手相見の小道具とは大分違っているけれど、生年月日を聞いたり（昭和生まれというのが判らず、当方に西暦の概念なく、申年生まれということと結着）、手相を見たり、人相を見たりで、まずは大同小異、が何ともどかしいことである。凶相との判定ではなさそうだったので、見物の学生たちは大笑いである。

○民俗村出発、ソウル特別市に入る。昼食後に市内観光である。ソウルの市内観光は、二十九日の午後と三十日の午前中十一時までで、その間に五、六カ所の免税店でショッピングを強要される強行軍、免税店だから安いという掛け声で若い女性の購買欲を刺戟する。韓国の外貨獲得に協力するわけである。当然のこと観光は馳足であり、バスの中での

説明を聞くのが中心という有様で不十分である。二日間の馳足観光で印象に残ったのは三カ所、オリンピック会場と景福宮と展望台での眺望である。走り回ったという印象ばかりで、その後関係も曖昧模糊の有様である。○オリンピック会場、メインスタジアムには入場見学、韓国が国運をかけて取り組んでいる五輪の主要会場、写真やテレビでおなじみの姿であるが、その形の美しさと壮大さには驚くが、一寸気になったのは工事が少し急ぎ過ぎで手荒なのではないかという点である。壁面などに塗りのムラが目立つし、装飾のつもりかどうか妙なところにニョキニョキと水道管のようなパイプが露出していたり、テレビ画面では全く気付かないところが気になるのである。会場入口の路面などもコンクリートブロックで、今の日本なら石を敷きつめるだろうなと思うことである。東京の五輪会場、今では老朽化して雨漏りなどが見られて手抜き工事など云々されることもあるようだが、十数年前の日本の建築工事の在り様をここで再見した感じ。円高差益による日本人の金満家的感覚が、そういうことを感じさせられるのであろうか。たまたま会場ではパラシュート降下の訓練が行なわれており、本番直

前の特訓現場を見学、今さらのように開会式の興奮を予感したことであった。韓国の人たちの血の騒ぎも判ろうというものである。

○景福宮は李王朝の正宮、壬辰倭乱で焼失したのを李王朝の末期の大院君の主導で再建したものを、柳宗悦らが保存に奔命したという優雅な光化門が南の正門、一九六八年に復元竣工したという、王と臣下が入り出すに区別があった三つの門の上に大きく翼を拡げたごとき屋根を有する正門の左右に小さな屋根が順次低くなりながら連鎖していく独特の様式美を有する塀、その向うに大きな石造建築物が屹立する。三階建てだけれども中央部は高いドームとなって丸屋根は緑色に輝いている、銅板の緑青であろうか。この調和を破る建物が旧朝鮮総督府であり、現在の韓国の国立中央博物館である。李氏朝鮮王朝の権威をたたきつぶす形で、巨大な石造建築がそそり立っているのである。古い絵図を見ると、中国の故宮にも似た美しい宮殿が、程よく配置されていた只中に居据っているのである。日帝統治の象徴が、永劫に消え去ることなく新生の大韓民国の中心部に姿を見せ続けるのである。反面教師の役目を荷い続けるのであろうか。私どもは心してこの景観を眺めなくて

はならない。全州市で見た小学校の作り方を想起したことである。

○旧朝鮮総督府の建物の背後に、李氏朝鮮を象徴する王宮の建物が雄大な姿を見せている。一八六七年に再建された（景福宮の各々の建物は一八六五年から七年間かかって再建されたものらしい）現存木造建造物としては韓国最大という勤政殿を始め、ハンゲルを創制した世宗王ゆかりという建物、方形の蓮池内に四十八個の石柱に支えられて建てられている重層の宴会用楼閣である慶会楼など、ガイドさんの説明もそこに馳足、数多くの韓国の宝物が蔵される国立中央博物館に案内される。私はその間、それこそ馳足で閔妃暗殺の現場というところに直行する。旧王宮の基礎らしい敷石の点在する広い庭園やら旧王宮の殿舎やらの間を抜けて行くと、右手に仏国寺の青雲、白雲両橋を模した基壇の上に法住寺捌相殿を模した五層の楼閣が見えるところに行き当る。前の国立中央博物館である。そこを通り過ぎると広い庭園となる。韓国の人たちが三三五五散策している。景福宮の一番奥深いところ、今は国立民俗博物館が建っている。その右側の木立の中に閔妃暗殺の現場がある。高宗の筆になる小さな記念

の石碑があり、その向い側に閔妃暗殺の様子を描いた画面が掲示されている。日本人であることが明らかなる暴漢たちが白刃をひらめかしながら、当時の李氏朝鮮の国母を斬殺している現場が生々しく目前に展示される。ガイドさんが日本人には案内しないと行って、私が確認したいと言っても、方向を指示しただけで説明しようとしなかった場所である。王宮内のこんなに奥深くまで侵入して国母を殺害するという傍若無人ぶりは驚くべきことである。日本の明治初年にこういうことが宮城内で起っていたとしたら、日本人の反応はどのようなものであったらうか、天皇の御不例に對しての自粛ぶりを見ていて背筋が寒くなる思いである。日本帝国主義の侵略政策を、声高に弁護する右翼の人たちは、こうした日本の暴虐の歴史を認識しているのである。うか。南京事件を否定する人々であっても、この閔妃暗殺は反閔妃派たる韓国人の暴挙とは強弁し得ないと思うのだが、どうであろうか。博物館に帰り着いた時は大分時間が経っており、広大な展示場の展示物を一つ一つ見て歩く時間はないので、広い吹き抜けの中央ホールを三階から階下から眺めることに没頭する。大理石のモザイク模様で美しい大ホー

ルは、上部に和田三造の絵画が掲げられ、豪宕という評語がふさわしい感じ、得意満面の征服者たるかつての日本の武官たちが、この場を濶歩しながら朝鮮統治の施策を議したはずである。韓国人たちは、ここに立って何を感ずるのであるかと思うことである。

○展望台というのはどこであったのであろうか。ソウル市にある展望台というのは、南山タワーマのあるところ、北岳山のそれ、北漢山のそれの三カ所があるようで、今ソウルの地図を見て推定しているところ。ぐるぐると山の麓を廻りながら小高い山頂にある展望台であった。少し離れた山々の峯を城壁が連なっているのが見られる、ソウル特別市が一望の地である。北岳山頂の展望台であったのであろうか。ガイドさんの説明、新しいソウルの市街は、漢江の南岸に拡大している、汝矣島ヨイドと呼ばれる国会議事堂の建っている島を中心として、五輪の会場であるソウル総合運動場のあるところまでの広大な地域が、新しいソウルとして発展している。漢江の北岸の旧ソウル市街は、旧王宮や南大門、東大門をめぐる古い商店街、そして北岳山麓に広がる古い豪邸などを見ることができけれど、新しい建物はあまり見られないと言う、確かに展望

台から北の方には全く高層建築は見られないのである。これは、朝鮮動乱以来北側の侵攻を恐れる心理が強く働いて、漢江を一種の防波堤と感じての展開であるらしい。漢江の奇蹟とも呼ばれる韓国経済の大発展は、漢江南岸を中心に興ったのであろうか。ここにも分断国家の悲劇を見るのである。

○二十九日の夜宿泊したプレジデントホテルはソウルの中心街にある、隣りにはロッテ財閥の建てたロッテホテルという巨大な建物が新築早々の姿を見せている。五輪見物のお客目当てのホテルが続々と姿を見せており、建築ブームは大変なものらしい。このプレジデントホテルは、以前から日本人客の多いところらしく、食事なども日本人好みになっているとのこと。事実日本人客がほとんどで、二三日の活字飢餓症状からはなつかしいと感じる日本語が飛びかっている。ソウル出張中の宋学長さんが一寸慰労にと立ち寄って下さる、夕食を御一緒したけれど、明朝緊急に教授会を招集しているの、夜を徹して全州市に帰ると言われる、南北直接会談を呼びかけて済州島から行進を始めている学生の政治的動きに対処するためらしい。韓国の学生の政治性は大分尖鋭であり、しかも大衆動員力を

有するらしい。大衆動員性の全くない、孤立化を深める日本の学生運動は自省すべきであろう。この夜、ソウル市内第一の繁華街（明洞^{ミンジョン}）というようである。仁田氏と全州師範での同期生、現在は東国大学校師範大学附属高等学校長である郭貴勲氏（広島の被爆者で相当大きな火傷を受けておられ、韓国では被爆者の代表として活躍しておられる人）の御案内で探訪する。夜おそくまで各種の屋台店が大声で客寄せしており（その気合に乗せられて、五輪マークのTシャツを大分買ってしまった、安いことも確かであるが）、その雑踏と喧騒は韓国経済の活力源を示すごとである。郭先生も外貨がダブツキ気味で上層部は困っていると話しておられた。経済のことはさっぱり判らないけれど、現在の韓国は日本を数年おくれで懸命に追走しているのであり、その距離は急速に縮まりつつあるという感じであるが、急ぎ過ぎのオーバードライブにならなければいいかと危惧する次第、日本の米国追走によるオーバードライブの歪みを実感している昨今だけに、その感が強いのである。

○七月三十日は、朝食後ショッピング中心の市内観光、とにかく免税店というのが多いこ

とである。店員も教養のある洗練された美人が礼儀正しく応待しており、旅行業者とタイアップして随分儲けているのではなからうか、大金を持つ観光客が押しかけているということでもある。学生諸嬢も大変なお荷物を持って移動である、お土産が多いのである。空港で早い昼食をすませて、搭乗手続きなどあつて十三時十分発の飛行機で福岡空港、所用時間は一時間十分でアツという間である。出入国の手続きも簡明である。旅行社の配慮もあるのであろうが、五輪前夜の緊張感などいうものは全く感じないで済んだようである。不快感は全くなかったと断言してよい。ソウルの五輪大会は、正しく事故なしに終了したようであり、韓国の国際信用は倍加しているごとし、何はともあれおめでたいことであるけれども、南北分断の悲劇だけは一日も早い終幕を迎えることを念ずるものである。これで韓国研修旅行の報告を終りとするが、最後に今回の研修旅行に同行下さった仁田茂氏、お世話下さった日本旅行社の皆さん、歓迎下さった全州教育大学の学長さん初め多くの皆さん方に深い謝意を表します。

○下手の長談義的報告、例によって編集後記の主旨から逸脱してしまつたが、脱線は何時

ものことと御寛恕願って、第二十三号に集まった原稿を見るに、これまた長口舌に過ぎるおくのほそ道研修旅行報告の雑文をのぞけば、今回も学科の活性化を裏付ける力作が揃ったようである。下垣内先生の論は、連載中の芸術俳諧史の続編、この論稿を集めればそろそろ一冊の本になるうかというもの、後五、六回書き続けて一本にまとめたいと言われる、一日も早い完成を祈りたい。その下垣内先生のところで行なった研究会での成果、それが周防の俳書「いさなとり」の翻刻である。昭和六十三年四月に卒業した文学部国文学科の大上、小谷、瀬口、渡辺四君の労作であるが、こうした学生諸姉の労作も、それなりに学問的評価に耐え得るものはどしどし掲載していきたいものと念じている。喜多先生の論稿「會津八一とうつつ心」は、先生の本学御赴任の御あいさつと言えるもの、先生の終生の課題としておられる八一研究の一環をなす論であり、いまだ好事家の偏愛的恣意的論究の傾向が強い八一研究に、客観的で学問的研究の方途を探究しての論と言えるもの、先生の積み重ねられてきた八一研究が、本学での研究生活の中で結実することを念ずるものである。

(4) —「願はくは花の下にて…」(山家集)「箱根路をわれ越えくれば…」(金槐和歌集) — 菅原先生の論「教材研究と教材の扱い方」は、国語教育の実践的課題について応えようとしたもの、先生が現在企図しておられる中等国語教育の実践的方法論に関する著作の一部を成す論であり、一日も早い論著の完成を祈りたいものである。曾田文雄・佐藤孝子共編の「師輔集」索引は、これまでも曾田先生ご指導で掲載している家集の索引作成作業の一つである。佐藤さんは来春本学の大学院文学研究科国語学国文学専攻修士課程を修了する予定の学生、源氏物語の条件文を主題にして修士論文を作成中であるが、この索引作成もその研究生活の一面を示すものである。曾田先生のご指導と佐藤さんの努力に敬意を表したい。

○今夏は研修旅行が花ざかりであった。文学部国文学科では、三年次生がおくのほそ道研修旅行で平泉から立石寺までの旅、鳴子から堺田までと山刀伐峠を歩いて健脚ぶりを実証したし、二年次生は万葉旅行でこれまた山辺の道を散策したという、近来研修旅行に積極的参加が少ないという嘆声が聞こえていたが、ここにきて再び活性化のきざしがうかが

えるようである。ありがたいことです、頑張りましょう。

○原稿の最終稿の提出がなかなかの人がいて、編集後記を草して随分時間が経過、佐藤さんも「源氏物語の条件文」という大部の論文を完成、無事に修士の称号を得ることができたし、時代も昭和から平成に移った。日本人にしか通用しない時代感覚なのであるが、昭和の聖代しか承知しない私どもには、新しい平成という時代に対する不安と期待が混在して、決して平静には平成の時代を迎えるわけにはいかない。私学人としては、むしろ不安感をもって平成の時代を迎えるのであるが、私どもは大学人としての自覚を新たに、この不安の時代を切り抜けていかななくてはなるまい。この文教国文学も、学会誌として一層の成長を遂げなくてはならないのである。今一度、頑張りましょう。

(横山邦治記)